

二〇二三年度入学式 学長式辞

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。御父母の皆様もお慶びのことと存じます。心よりお祝い申し上げます。本日、経済学部、経営学部、理工学部、文学部、法学部の五つの学部と、経済経営研究科、理工学研究科、文学研究科、法学政治学研究科の四つの研究科をすべて合計しておよそ一九〇〇名の新入生のみなさんを、ここにお迎えできたことは誠に喜ばしい限りです。

三年前から拡大し始めた新型コロナウイルス感染症のもと、これまで経験したことがないような苦しい状況を経て、見事に合格をつかみ取られた新入生のみなさんの努力に心から敬意を表し、お祝いの言葉を述べたいと思います。

二十世紀の初頭、当時の画一的な教育に疑問を感じていた中村春二という青年教師が、成蹊園という名前の私塾を開きました。成蹊園から成蹊実務学校に、そして現在の成蹊学園、成蹊大学に至る百年以上の長い道のりにおいて、学ぶ者一人一人の個性を尊重した教育を行いたいという思いは、本学がゼミや研究室での学びを重視し、少人数教育を意図してきますように今でも強く受け継がれています。また、この百年以上の歴史のなかでも、池袋から吉祥寺の地に学びの場が移ったことは大きな出来事でした、吉祥寺という文化的に変遷魅力的な街に大学があるということはみなさんの四年間を大いに豊かなものにしてくれることに違いありません。

かつてこの地に金子光晴という詩人が在住していました。独立不羈の精神を持ち、数々の優れた作品を残したこの詩人が一九六一年に「成蹊に寄す」という美しい詩を発表しています。五日市街道から見たけやきが並び立つ風景をまず称え、並木の間からのぞく本館を「水底にうつっているようなしずかな校舎」と描き、その校舎で究められている学問が詩人のイマジネーションのなかで美しく語られています。そうして、詩作当時六五歳だったこの詩人は自らの老いと対比して、成蹊の学生の未来を羨みまた祝っています。一連一連に成蹊と若い学生諸氏への思いの籠ったとても良い詩です。この詩をお贈りし、みなさんのご入学を祝したいと思います。

成蹊に寄す

金子光晴

あのけやきはいい、

けやきの落葉したあとの幹や梢が

軽金属の激しさで、青さで、

冬の寒空に沈んで、響いてゐる

あのけやきのあひだに

水底にうつつてゐるやうな
しづかな校舎がある。

その方向に、澄んだ頭脳の

磁力が、僕をひく。

そこには、学問がある。

学問の周りにはりつめた

氷の塊のやうな真空がある。

僕は、ちつとその方を見るが、
そして、それを感じるのだが、
そこからの冷徹な風が、

僕の痴呆な精神をむちうつが、

僕の過去のらいだな眠りや、

しみだらけな皮膚や、

希望や、判断や、批評を失った

蒼ざめた顔に痛く、突刺るが

僕にはもうおそい。

僕は、青春ではない。

かつては青春だった

そのうしろ影にすぎない。

あそこの階段をのぼり

あそこの椅子にかけ、

未来を吸取るものは、

僕ではない。それは君らだ。

僕には、悔ゆべき

過去があるだけだ！

僕には、悲しむべき

過失の歴史があるだけだ。

学生よ。君たちのいのちが

君たちの智恵を結晶させる

そこは、道場だ。バルカンの
槌ふりあげる、そこは岩屋だ。

朝夕、僕は、それをながめ
学生達の流をみおくる。

もはや僕には理解もできない
明日の構図が君たちを導く。

あのけやきはすばらしい。

けやきの芽ぶいた幹や梢が

放電する閃めきで、紅さで

冬の寒空に弧をゑがき、燃上る！

「あそこの階段をのぼり あそこの椅子にかけ、未来を吸取るものは、僕ではない。それは君らだ。」この詩人の思いは、私の思いでもあります。魅力ある街のなかの、この魅力に富んだキャンパスのなかで、心ゆくまで学業にまた課外の活動に励み、確かな未来を掴みとってください。皆さんが本学に慣れた頃にはけやきも緑豊かにその姿を整えるでしょう。本学での皆さんの学びが豊かで実りあるものになることを心から願っています。

二〇二三年四月四日

成蹊大学長 森 雄一